

「壹岐・対馬の道」に見る司馬遼太郎の朝鮮観

RYOTARO SHIBA's the recognition about CHOSUN on 「The road of IKI・TSUSHIMA」

全 彰煥

【要 約】

本稿は、司馬遼太郎氏の朝鮮(韓国)関連紀行文の3部作 — 「韓のくに紀行」「耽羅紀行」「壹岐・対馬の道」 — 研究の一環であって、朝鮮関係の表現を中心に司馬氏の朝鮮認識について探ってみるのに目的がある。

その内容は、1) 日本神道の原型は対馬にあり、対馬の古神道は朝鮮に定着した古代大陸信仰の影響を受けていたと見ていること 2) 「遣新羅使」の存在確認と単発性・無成果であった役割の分析 3) 豊臣の朝鮮出兵の無謀さと日韓合併の間違いの指摘 4) 中西氏の山上憶良の百済流民説への賛同 5) 古代朝鮮半島の文字(イドゥ等)が存在していないことへの残念な遺憾表明 6) 元・高麗連合軍の日本侵略過程説明 7) 朝鮮儒教文化の前近代性と閉鎖的弊害の指摘等である。

このような内容において、1) 日本の古神道の原型が対馬 ⇒ 朝鮮半島 ⇒ 大陸北部の経由であると主張している司馬氏の立場はいつも一貫している。2) 「遣新羅史」に関する言及は、その歴史的存在自体がほとんど知られていない韓国側としては意外であるが、統一新羅の華やかな発展とは別に、日本側に積極的外交政策と国際感覚があったのを反証していると考えられる。3) 豊臣の朝鮮出兵と日韓合併について、司馬氏は否定的批判の立場を堅持している。4) 中西氏の主張を引用した山上憶良の百済流民説に対して賛同している。5) 古代朝鮮の文字が不明であることに遺憾の意を表している。6) 高麗末期は日本の倭寇勢力に蹂躪されて滅亡への決定打を受けていたことに対する司馬氏の認識は見当たらない。7) 朝鮮儒教に対して否定的認識をもっていたのが分かる。

キーワード：司馬遼太郎、「壹岐・対馬の道」、「街道をゆく」

I. はじめに

「壹岐・対馬の道」の旅は1977年11月のことであって、1978年2月から8月まで朝日新聞に連載された。司馬遼太郎の韓国(朝鮮)関連の初めての作品である「韓のくに紀行」の旅は1971年5月のことであり、「耽羅紀行」の旅は1986年3月のことであるから、「壹岐・対馬の道」の旅はちょうどそのまん中のことになる。つまり、「韓」⇒「壹岐・対馬」⇒「耽羅」という順番になるわけであるが、司馬氏本人の意図とは無関に、いわゆる朝鮮(韓国)関連のこの三部作は、内容的にも関係があると考えられる。因みに、本稿はすでに発表となっている『「韓のくに紀行」に見る司馬遼太郎の韓国認識』¹⁾、『「耽羅紀行」に見る司馬遼太郎の韓国認識』²⁾の延長線での研究である。ま

た、既発表の上記の二つの紀行文と同じく、「壹岐・対馬の道」に記されている朝鮮関連の直接表現を中心に、司馬氏の対朝鮮認識について探ってみるのに目的がある。

II. 本 論

1. 対馬の人

○ 良田無し、ということで、この島民が室町に倭寇になり、朝鮮沿岸の米倉をねらって荒らした。《中略》

対馬藩主宗氏は三百諸侯の一つでありながら、同時に朝鮮との関係では両属のかたちをとった点、琉球が中国との関係において中国によりつよく力点を置きつつ両属のかかわりを結んだことに似ている。 <p. 13, 16>

対馬は朝鮮半島と最短の距離にあって、対馬人は倭寇として朝鮮半島を蹂躪していた。また対馬が、壱岐・松浦・五島列島の所謂「三島倭寇」の中心的存在であったのは周知の事実である。

ここで司馬氏は、対馬と朝鮮の関係を琉球と中国との関係に例えている。ただ、琉球人が倭寇として活動していたのかどうかについては諸説があって、日本国内では否定的意見が主流である。

2. 壱岐の卜部

○ 専門の神道者がこの術を用いたが、かれらの奇妙さは壱岐・対馬に集中的にいたということである。大和の王朝がわざわざ玄界灘の洋上からかれらをよんで宮廷の科学を担当させた。このことは壱岐・対馬を考える上でとくに重要なことではないか。 <p. 23, 14>

○ 日本の壱岐・対馬に漂着して根付いたト占は、古神道の一核心をなしながら日本列島の固有のものではない。朝鮮からきたことは、自明のことである。 <中略>

このト占ははるか北アジアにひろがっていたその朝鮮版が、壱岐・対馬にきたのであろう。 <p. 25, 8>

司馬氏は、古代の南朝鮮の伽耶と日本が鉄を媒介に盛んに交流していて、その過程の中で朝鮮化した大陸の古代信仰が日本に古神道の源流として定着したと見ていて、このような意見を他の作品でも一貫して述べている。対馬の旅の後の済州島の旅で、地元の土俗信仰の担い手である巫女（韓国では、「巫堂：早堂：ムダン」と言っている）に相当な関心と時間を割愛していたのも無関係ではなく、済州島の巫女から古代日本信仰の原風景を見ているようだと述べている。³⁾

3. 唐人神

○ 遣新羅使というのがあった。その船に乗っていた一人が、往路、壱岐に着いてから疫病で死んだ。 <中略> 朝鮮への飛び石一つである壱岐へわたるだけでも命がけであった。 <p.31, 15>

○ 壱岐には、唐人 — 漂流朝鮮人であろう — を祀った古趾が多い。海のむこうから来た客人を神に近いものとして崇敬する民俗が西日本の島々や海浜にあった。 <p. 35, 10>

「遣新羅使」の存在については韓国でもほとんど取り扱われていない。それは司馬氏の指摘とおりに、当時、現実的な役割を果たせなかったという歴史的評価による結果であると思われる。一方では、百済の流民が朝廷で大きな政治勢力となっていた日本の政治状況を鑑みる必要があると思われる。

4. 宅磨のこと

○ 天平八年（七三六）年、遣新羅使の一員として、潮路を朝鮮にむかってゆく途中、壱岐で病死した若者（と想像する）は、雪連宅満という名である。 <中略>

このときの遣新羅使に課せられた使命も結局不調におわるのだが、そのことを大使、副使以下四十余人がみななんとなく出発のときから感じ、意気があがらなかった、という説がある。史料としてあるのではなく、かれらが詠み、あるいは贈られた歌が『万葉集』第十五巻におさめられているが、それら百四十五首の調子がじつに悲しい。 <中略>

新羅に遣はさえし使人ら別を悲しびて贈答し、また海路にして情を働み思を陳ぶ。

と、ことばがきにある。

冒頭の歌は、

武庫の浦の入江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし

である。

ともかくもこの遣新羅使は日本の政治史にはどういう貢献もしなかったが、大坂湾を出て以来、船泊りのつどおそらく全員が歌を詠み、そのうちの秀歌を記録し、保存し、ついに帰還まで百四十五首という大量の秀歌を『万葉集』に入れたということで、文学史上の大きな業績をのこしたことになる。 <p. 38, 6>

司馬氏は、遣新羅使の一員であった雪連宅満は

吉岐出身の宗教人として朝廷に選ばれて道案内役を果たしたが、たまたま新羅行き の 道程の途中に吉岐で病死したと見做している。そして、その姓の「雪」は当時の日本風ではない朝鮮の影響によるものだと見ている。

ここで、上記の「いうまでもなく『万葉集』は国家の意志で撰されたものである」と「ともかくもこの遣新羅使は日本の政治史にはどういう貢献もしなかったが、大坂湾を出て以来、船泊りのつどおそらく全員が歌を詠み、そのうちの秀歌を記録し、保存し、ついに帰還まで百四十五首という大量の秀歌を『万葉集』に入れたということで、文学史上の大きな業績をのこしたことになる」という言及に注目したい。遣新羅使の政治的意味とは関係なく、関係者の歌を 145 首も国の象徴的文獻に残しているのは示唆・暗示する所が多いとしか言えない。「大陸系宗教人の吉岐人 ⇒ 雪連宅満 ⇒ 朝鮮（中国）式の姓」の図式は、『万葉集』の作者未詳の多数の歌 ⇒ 家族・人間・離別の歌 ⇒ 朝鮮が大陸系の可能性」という可能性と説と関連づけられると考えられる。⁴⁾

○ 姓についていえば統一新羅などは徹底していた。唐という巨大帝国からの圧迫をよりすくなくし、利益をより多くひきだすために外交の妙のわざをつくりしたが、ついに朝鮮古来の氏族のよび方や名のつけ方まで廃し、中国式にしてしまった、と私は思っている。 <p. 44, 9>

統一新羅以降の朝鮮半島人の姓名の中国化について司馬氏はその残念な気持ちに一筋に貫いている。その原因としては、中国の機嫌を取らざるをえない朝鮮半島の定めと儒教の影響を取り上げている。⁵⁾ 司馬氏の見解は確かであろうが、文化の流れという観点からみると、隣の国の大国の影響を受けるのは自明の理であって、古代朝鮮半島固有の姓名が守れなかったことに対する遺憾の念は論者も司馬氏同様である。それに、漢字の意味を名前に生かして適用しているのは日韓共通であることから、同病相哀れむところがある。

5. 豆腐譚

○ いまの高知市にもその町名が残っているが、城下の鏡川の北岸に唐人町というのがあり、秀吉の朝鮮侵略のときに連れて帰った唐人に屋敷地をあたえて住ませたという。かれらに豆腐の専売権をあたえて他の者にはやらせなかったというから、高知の豆腐はひよっとするとこの系列が相当ながくつづいたかもしれないのである。

豆腐は、朝鮮語で dubu という。 <p. 75, 11>

豆腐の源流が朝鮮とは言えないが、秀吉の朝鮮侵略の遺産が高知に残っているという事実を知っている韓国人はほとんどいない。

6. 神皇寺跡の秘仏

○ 大まかなその理由は、中国、朝鮮の王朝を成立させている古代的農業社会が、地球上の他からの経済や文化の刺激によってこわれることをおそれたのであろう。

徳川日本の鎖国は、いうまでもなく三代将軍家光の代の十七世紀からだが、それまでの日本人には私貿易においても海外渡航においても、原則的に自由であった。《中略》刺激のまっただなかでにわか鎖国されたからこそ特異な文化が醗酵されたとみるべきで、古くから鎖国だった中国・朝鮮では、鎖国が常態であったために、古代が温存されつづけただけであった。 条件の相違にすぎない。 <p. 102, 8>

上記は、中国と朝鮮の鎖国と日本の鎖国の相違点に対する司馬氏の明快な解釈である。論者は大陸国家の鎖国と半島国家の鎖国に関しての綿密な分析が要ると考えているが、確かに島国の鎖国とは裏事情に差があって、この微々たる — 鎖国の中の自由な私貿易と渡航が、国の政策によるとは思えないので — 原因が至大な文化的特徴にまでつながったという結果に驚かざるを得ない。

○ 幾万でなく幾千であったとしても、それほどの人数を連れて帰ってしまったかと驚かされる。

日本側にとってこの朝鮮侵略は国内を疲弊させただけでなんのもたらすところもなかった。た

だ室町期からつづいた茶の美術の隆盛期にこの
侵寇戦争は起こっている。朝鮮の民衆が用いるめ
し茶碗や雑器が、海をわたって日本の美意識の中
に入りこむと、美学という人類が持った最高の錯
覚に照射されて宝石以上のかがやきを持った。 <
p.109, 4>

豊臣秀吉の朝鮮出兵に対する否定的批判は「韓のくに紀行」にも述べられている⁶⁾。また、司馬氏の指摘のとおり、家康が朝鮮出兵から免れていたのが後の天下統一と無関係と言えないのなら、これもまた隣国の歴史の宿命であるだろう。さらにいえば、新羅、高麗も倭寇の絶えずの侵略と略奪に苦しめられて国力が衰退してしまったと言っても過言ではない。李王朝の建国者である李成桂は倭寇征伐の功勳をもとに権力の中心部に近寄ることができ、結局は軍部クテータで自ら王になったのである。朝鮮は中期以後もう衰退の一路に入っていたので秀吉の侵略を受けたわけで、この戦争で活躍した李舜臣が新たな国を建てなかったのは、朝鮮民族の歴史の不幸な一事件であったと論者は考えている。

○ ともかくも徳川家は自分の手が汚れていないために、送還を約束した。が、いったん「宝石」をうむひとびとを抱え込んだ諸藩はこの勸告をきかなかつた。 <中略>

双方、相互主義の原則をもちつつも、さまざまな点で凹凸があった。日本側が沿道の諸大名のはしばしにいたるまで朝鮮通信使を重んじすぎ、一方通信使のほうは儒教的尊大さを持しすぎるということもあった。儒教国と非儒教国の差ということもあるであろう。 <p. 110, 15>

朝鮮外交の非現実的な面を確実に見せてくる事実であろう。秀吉の侵略は、当時の日本国力の一部を持って朝鮮全土を簡単に踏みつぶせたのにも、朝鮮は儒教の尺度をもって日本を見くびっていたし、中国一途の李王朝は世界の情勢どころか隣国の情勢に対しても客観的判断のできない情けない実態にあったのである。

7. 志賀の荒雄

○ ただ山上憶良は、当時の人としては文明の感覚や人間意識の点でかけはなれた — 日本離れした — ところがあり、荒雄の死についてそれを俵として感じる精神と教養をもっているのは、あるいはこの人だけではなかったかとも思われる。

山上憶良は百済人の子ではなかったかという推定を、前期の中西進氏は持っておられる。 <中略> ほとんど百済ぐるみが日本にひっこしたのではないかという想像が『日本書紀』の記述によって可能だが、中西氏は『山上憶良』で綿密に論考されつつ、やがて、自分の推定にもし従うとすれば、として、憶良は百済でうまれた、とし、四歳のとき「故国滅亡の嵐の中を」父憶仁につれられて日本に渡航した、としておられる。 <p. 137, 2>

山上憶良が百済の流民であろうという中西氏の見解に賛同するような司馬氏の意見はもう触れたのだが、大伴家持と父の大伴旅人⁷⁾も憶良と同じ家風の万葉歌人であることを勘案した場合、憶測として百済の流民である可能性を排除しきれないと思われる。この点、韓国の関連学界でも1980年代以後の大きなテーマとなっているのは言うまでもない。

8. 対馬の“所屬”

○ ト占という古代における一種の科学を含んだ日本神道は、杵岐・対馬からはじまっているのである。かれの同級生は神道の官立学校にいながら、そのことを知らなかったのではないか。 <p. 160, 5>

引き続き、司馬氏は日本古神道の典型が杵岐・対馬にあると主張している。これはもう35年前の説であるのだが、日本の神道学者と神社の関係者はあまり取り上げていないのが事実である。

○ 対馬の場合、済州島よりも朝鮮半島に近いのに、『魏志』の倭人伝という三世紀の世界を書いた史書でも、「対馬国」として邪馬台国に属

している。邪馬台国から地方官として卑狗（彦のこと？）卑奴母離（夷守）が派遣されている、と書かれているが、要するに上代から倭人世界の濃密な一地域であり、朝鮮世界に属したことがない。両島の歴史地理の関係は、ふしぎといえふしぎである。〈p. 161, 1〉

○ こんど公開されたこの国務省外交機密文書によれば、一九五一年七月九日、韓国の駐米大使ヤン氏が、当時の国務長官ダレス氏に会い、対馬の領有を主張した、となっている。堂々とした外交交渉である。〈中略〉

室町期から戦国にかけて東アジアの沿岸に出没する倭寇のうち、朝鮮沿岸を専門とした者のほとんどは、対馬人であった。〈p. 163, 2〉

李承晩大統領が対馬の韓国領を主張したのは、ハープニングだったと言っていると思う。振り返って、韓国（朝鮮）の政治史の中で、外国と領土領有権で外交摩擦を起こしたのは、独島（竹島）問題以外唯一無二であろう。これまた、日本の敗戦が招いたことで、李大統領としては絶好のチャンスとして思っていたせいであるかも知れない。当時も今も、李大統領の主張に耳を傾けていた韓国人はほとんどいない。

○ 朝鮮は中国以上に中華思想がつよく、むしろ激烈である。中華思想をもつ者が「人」であり、持たないのは夷狄であり、それを漢字文化としてしか持っていない中途半端な日本人の場合、特殊人として「倭」としか言いようがない、というのがその基本思想であろう。〈p. 165, 4〉

○ これを一挙に簡素化したのは、將軍の補佐役だった新井白石（一六五七～一七二五）であった。かれは朝鮮通信使の傲岸さをたしかに憎んでいた⁸⁾。〈p. 168, 10〉

前述のとおり、朝鮮の政治家の眼中に日本という存在はもう無かったというか、強いて認めたくなかったかも知れない。反面、日本としては、朝鮮はもう先進文物・文化の不思議な国ではなかったのであり、新井白石はよくそれを見極めていたのであろう。つまり、朝鮮は、特に中期以後の朝

鮮は国際情勢の中の自己判断力をもう完全に失っていた状態であったと言わざるを得ないし、新井白石の判断は予想された当たり前の結果であったわけである。

9. 雨森芳洲

○ 日本の儒学は、中国や朝鮮のように科擧の制がないために、国を挙げてやるということではなかった。いわば専門家にまかせるという主義で、古く京都の朝廷で博士家をその専門の家として、維持させた。鎌倉になって武家政治が出現すると、統治学としての儒学はおとろえた。日本の武家政治というのは、中国でいう法家にちかい。〈p. 171, 2〉

○ 庶民出身である雨森芳洲が二十一、二歳で対馬藩に聘されたのは、師の木下順庵の推輓だったのかどうか。ともかくも芳洲は対朝鮮関係の書記であることを天職と心得、厳原で八十八歳まで生き、吏僚としての生涯を大過なくすごした。〈p. 179, 3〉

「国境」と「人種」に捕らわれない「文化」の普遍主義を基盤とする雨森芳洲に対する従来の評価は、昨今は「中華」から「日本中華主義」への変化過程を重んじる研究まで来ている。特に、朝鮮関係における芳洲の理解と役割は、日韓関係の中では前例のない先駆けのものであったに違いない。⁹⁾

また、若い内は儒学信奉者であった芳洲が、中国中心の一方的に偏った朝鮮儒学ではない客観的な「日本中華」を経てバランスのとれた儒学者となったことについて、韓国は注目しなければならないと考える。

○ 申維翰の『海遊録』では、全文を読めばかれの雨森芳洲への愛情がおってくるようであるが、しかし要所要所では、抽象的ながら、雨森が悪党でもあるかのように書いている。〈p. 179, 14〉

○ 朝鮮と日本の関係は、ときに個人レベルでの友情も成立させがたいほどにむずかしい。そのことがすでに十八世紀初頭から存在している

のである。〈p. 181, 2〉

雨森芳洲と申維翰は、外交家としての親交の厚かったものの政治家としての軌轍もあったようである。「個人レベルの友情も成立させがたい」といった司馬氏の指摘の例は、時期と国籍とは無関に数えきれないほどあったはずである。

10. 告身

○ 李承晩博士は偉大な民族主義者であった。

〈中略〉 あの悪しき日韓合併以前に脱出(一九〇四)し米国でまなんだ。 〈p. 183, 1〉

○ 中華思想にあっては野蛮人の国名や人名を漢字表記する場合、鄙字を用い、好字を用いなかった。 〈中略〉

ここに書かれている年号の「成化」とは、朝鮮のものではない。明国のそれである。

朝鮮は、中国大陸に隣接しているため国をたててゆくについて困難な環境にあった。朝鮮独自の年号を用いたこともあったが、国家の安全の上から中国を宗主国とし、その年号を用いたことのほうが多い。といって十九世紀のヨーロッパ的概念における属邦ではなく、単に宗支 — 本家・分家 — という儒教的礼教を原理とするそれであったといっている。 〈p. 184, 11〉

○ この「告身」にある成化十八年は、李朝朝鮮の成宗のときである。朝鮮では国外だけでなく国内においても中国の正朔を奉じていたから、このことは李承晩博士があるいは持っていたかもしれないヨーロッパ的概念から見れば朝鮮は中国の属邦ということになる。 〈中略〉

中華とは簡単にいえば対外意識において他国を野蛮人とみる意識なのである。この時代もその後朝鮮の公文書では、日本の室町大名や小名はみな倭酋とか巨酋とかいった表現でかかれている。酋とはいうまでもなく未開人のかしらという意味だが、ひるがえっていえばそのように書かねば自国が中華、小中華にならない。中国、朝鮮が凄惨な停滞におちいったのはこのためであった。古を尚ぶという停滞こそ儒教的には正しい姿であり、相手を正視する視点をもたず野蛮国でもって片づけてしまわねば、自分の礼教が立たない。

国家儒教とはそういうものである。 〈p. 187, 13〉

「日韓合併」に対する批判的見解は「韓のくに紀行」¹⁰⁾「耽羅紀行」¹¹⁾にも述べられている。この点は賛否両極端の日本国内の評価にもかかわらず、合理的な司馬史観の重軸となっていると考えられる。

「告身」という言葉に対するしつこく緻密な批判分析は、儒教が儒学として定着した朝鮮の停滞性だけではなく、儒教文化圏全体の批判に拡大されている。論者は司馬氏の朝鮮儒学の弊害について概ね賛同であるが、「古を尚ぶという停滞こそ儒教的には正しい姿」であるという言及はどうしても大げさなところがあると思われる。というのは、文化的優越感から生じた「言語暴力」は歴史上、いくらでもあるからである。中華思想の側面を見た場合「韓族」の「韓」も、モンゴルの漢字表記である「蒙古」¹²⁾も野蛮人の意味であり、「倭寇」が同じ脈絡で呼ばれはじめたのもそうである。文化という大きな流れから造り出される産物は特定の分野に限らないわけである。古を貴ぶのが儒教の誠の姿であるという司馬氏の指摘は思想に対する結果的見地である。儒教の一定の属性のために、中国と朝鮮が凄惨な停滞に陥ったとはいえるかも知れないが、その決定的原因となったとは言いきれない。思想とイズムは人間の運用によってもうその原型の姿は薄まって変わってしまうものであって、「共産主義」も「資本主義」も、すでに本来の理論と実行の結果は完全に別のものとなっているのは自明のことである。

11. 溺谷

○ 稲作の伝来に関して想像すると、たしかに中国南部からもきたであろう。しかし主として朝鮮半島を経由してきたという説はうごかしがたい。 〈中略〉

三世紀の対馬の卑狗も、四世紀後半から五世紀の人と思われる鶏知の前方後円墳のぬしも、朝鮮半島や博多湾沿岸のひとつとのおなじ型の米を食っていたであろう。 〈p. 198, 8〉

「人類の歴史は、人間の認識を遥かに超えた時代から存在していた」¹³⁾ というある歴史家の話もあるが、卑弥呼の大和時代以前から北九州と南朝鮮半島の交流があったと想像するのは無理なことではないだろう。

12. 祭天の古俗

○ 対馬・吉岐が、朝鮮からやってきた鹿トの受け皿になっていたことは、まぎれもない。

《中略》 この時期の対馬・吉岐というのは、本土に対してもっとも華やかな位置を占めた時代であった。 <p. 207, 5>

○ 対馬の道を往きつつ右のように考えると、日本の神道が決して日本列島固有のものではなかったということがわかる。 <p. 208, 13>

○ 縄文時代、多分に南方的な言語と信仰をもっていた日本列島居住民のなかに対馬・吉岐を北方から串刺しにしてやってくるのは、この天の思想である。

日本の古神道に天つ神があらわれるのは、右の要素をのぞいては考えられない。 <p. 209, 14>

吉岐・対馬で日本古神道の原型を感じていた司馬氏の認識は、もはや日本神道が日本列島固有のものではないという断言にまで繋がっている。まさに日本の古神道は、大陸系と南方系が混ざって誕生したもので、それが日本の近世国学者によって生まれ変わったという論理がつじつまの合うと思われる。

13. 巨済島

○ 一般に朝鮮漢文には独特のはげしさが秘められているように思える。その激しさが「風濤蹴天」という自然描写のなかにも激越ななにごとかを秘めた表現を生んだのであろう。 《中略》 モンゴルの脅迫によって日本遠征の先鋒をつとめさせられる高麗朝の悲劇的な運命まで暗示しているのである。 <p. 221, 5>

高麗を征服した元が日本征伐のために周到な準備をしていたのはよく知られていて、済州島の馬と牧草地はその目的の一環として出来たのである。

そして、あの有名な「神風」は、1281年5月にはじまった元の第2次来襲の時、7月30日から5日間起り、元に決定的打撃を与えたと言われている。そもそも、征服者たちの道案内役は地元の原住民であったのは歴史の常識であり、元軍の案内役も当然高麗人が果たしていたと考えられる。当時の高麗はすでに失敗で終わった元の1次日本攻撃のため国全体が疲弊して引き続く元の侵略戦争準備に餓死状態であったのは言うまでもない。ここで、これにかかわる韓国側の憶測仮説を紹介すると、元の日本征伐を失敗と終わらせるために、わざわざ台風の時期を計算して案内したという説である。根拠のない仮説ではあるが、当時の切実な高麗の事情で増派の後援軍を合流させなければならなかった背景等を顧慮した場合、決して考えられないことでもなかったような気がする。「風濤蹴天」にそんな意味深長な伏線が敷かれていたのかもと、発想力を生かしてみるのはやはり歴史小説なんかで出来ることだろう。

14. 佐護の野

○ 古朝鮮は、古日本と同様に、固有の文字がなかった。古朝鮮が記録時代に入るやいなや、記録には漢語、漢文を用いたことが、それらを日本に伝える上で日本のためにはなかった。しかし朝鮮にとっては記録を中国語に置きかえて — それも鮮やかすぎるほどの漢文で — おこなうために、後世にとっては古朝鮮語がどんなものであったか、わからなくなってしまった。古日本の場合、『古事記』と『万葉集』がのこされたおかげで古語が中学生の学習書の中にまでコトパとして生命をもちつづけている。もし古朝鮮のことが書かれた『三国史記』が朝鮮語によるものであったなら、日朝の比較言語学というのはよほどおもしろいものになっていたにちがいない。

古朝鮮語というものが、せめて地名にでも残っていればすばらしいものであったろうと思うのである。統一新羅王国は対中国政策で惨憺たる苦心をしたことは大いに評価されねばならないが、その大政策の一環であったのかどうか、全朝鮮の地名をすべて漢語漢音にしてしまうという思い切った文化大革命をやったのけた。このため、地

名からも古朝鮮語が消えた。もし地名にそれが残っていたら、対馬にきて古朝鮮の地名との異同を考える楽しみがあるのだが、いまとなれば対馬単独で考えざるをえない。 <p. 236, 4>

○ 地名や姓からさらに連想するのだが、私は当初、対馬には濃厚に朝鮮のにおいがのこっているだろうと思っていた。が、方言にも、指摘が可能な痕跡というのはなさそうである。《中略》

対馬人の体型は、朝鮮型よりもむしろ瀬戸内海沿岸地方に相似しているといわれる。この理由、その第一は、七世紀の日本と統一新羅の緊張に由来する。《中略》

その後も、朝鮮からの渡来人が多く、緊張関係にある新羅からさえ大規模な渡来があり、六九〇(持統四)年、かれらを国家があっせんして武蔵に入植させたりした。対馬に入植させたという例は、記録上一件もない。 <p. 238, 6>

司馬氏は朝鮮の古代文字にも関心が深かったようで、その資料の不在に対する気の毒さを隠さなかった。確かに資料は残っていないが、文字がなかったわけではない。三国時代(百済・新羅・高句麗)以前から漢字を借りて固有の音を付けた形の表記法が広く使われていた。「イドゥ(이두)」がそれで、三国時代の新羅の官吏たちが行政文書を作成する際に使い始めた漢字表記の散文から由来したとみるのが韓国の定説となっている¹⁴⁾。この「イドゥ」文では、名詞と動詞の語幹等、単語の実質的ところに主に漢字語が使われていて、文法的なところで「イドゥ」が使われていた。朝鮮半島に漢字が入ってから一定期間が経つにより土着言語に合わせた「疑似漢文」の痕跡が見えるのだが、「イドゥ」はこの「疑似漢文」に文法的要素を補充したのである。司馬氏の指摘とおりに、「イドゥ」で詠まれた歌 11 首だけが残っているのは残念なことである。ただ、6 世紀以前から、朝鮮半島独自の文字表記方式があったというのは、文化力量の反証であると言えるだろう。

対馬人の体型について触れながら、それが古代朝鮮人ではなく瀬戸内海沿岸地域系に近いと言っている。これは、司馬氏が古代日韓関係において、南朝鮮半島と北部九州との頻繁な交流、往来を主

張していたこととは一致しない。古代対馬の原住民の存在を認めるべきかどうかは別件として、古代人が玄界灘を往き来していた可能性を認めた場合、対馬は単純な停泊地ではなかったはずであって尚且つ混血の可能性が高いと見做すべきであろう。つまり、体型云々のところではないと考えられる。

○ 罪を犯した者を奴隷にして王より臣下に下賜するという制は、高麗朝にあり、李氏朝鮮もそれを継承している。安河内博氏は、対馬藩の古文書を豊富に用いつつ、李氏朝鮮の文献例と照合し、断定は避けておられるが、「朝鮮の奴婢制度の影響がはたらいていることは論定できるのではなかろうか」とされている。

佐護郷の仁田の水田地帯に入ったとき、ふとそのことをおもった。もしそうであるとすれば、近世の対馬における朝鮮の影響は、もっとも重要な部分で息づいていたと言えるかもしれない。 <p.244, 1>

朝鮮の制度が近世の対馬に影響を及ぼしている可能性について触れている安河内博氏の言及について、韓国の研究者は注目しなければならないと思われる。安河内博氏の指摘とおりに、朝鮮の奴婢制度は近代化の目前まで盛んであって、資料も豊富である。1894 年甲午改革で公式的には廃止されたが、事実上は 1930 年代まで存続していた¹⁵⁾。日本の奴婢制が 16 世紀末公式的になくなったのと比べると、朝鮮後期の滞っていた閉鎖的前近代性を改めて考えさせられる。

15. 赤い米

○ 多久夫須麻新羅へいます君が目を今日か明日かし 齋ひて待たむ(『万葉集』三五八)《中略》

「あなたが下着にせよとって贈ってくれた衣の紐は、ふたたび逢う日までは解きません」《中略》 さらに下着については見送る女性の側が自分の下着を相手に着せてふたたび直接に逢うまで着つづけてください、というのもある。 <p. 245, 15>

○ この遣新羅使が武庫の津を船出するのは、天平八（七三六）年六月である。前年の二月に新羅から使いがきた。新羅・唐軍と戦ってやぶれた白村江水戦（六六一二）から七十三年をへて国交は回復している。といてしこりが消えたわけではなく、さかんな往来とはいえない。 <p. 246, 12 >

上記の歌は、「新羅へお山になるあなたにふたたびお目にかかれる日を今日か明日かと身を潔めて待っていきましょう」という意味で、女性から男性へ送った歌である。客死を覚悟して旅立つ夫との妻まじい惜別の歌であり、前述のとおり『万葉集』第十五巻に百四十五首もある。

他に、防人歌があるが、これは大化の改新の後、九州沿岸の守りにつた防人が詠んだ歌である。防人は厳しい任務であり、遠い東国から九州までを自力で移動せねばならず、さらにその任務期間中の兵は食糧も武器も各自で調達しなければならなかった。また、税の免除も行われなかったため極限の状態であったそうで、その様な状況で作られた歌が防人歌である。次は福岡、志賀島の防人の歌である。

「韓衣裾に取りつき泣く子を置いてそ来ぬや母なしにして」、意味は「唐衣(韓衣)にすがって泣きつく子どもたちを防人に出るため置いてきてしまったなあ、母もいないのに」で、当然ながら作者未詳の歌である¹⁶⁾。『万葉集』の数多い作者未詳の歌と名の知られてない防人の歌は、「家族・恋人」と「別れ・愛」を主題とする断腸の念を基本としている共通点があり、またそれが朝鮮半島との状況と繋がっていることは、偶然にしてはあまりにも似ているようである。

16. 千俵蒔山

○ 古代には人間が自由に往来していたはずの日本と朝鮮のあいだで、はじめて厳重な国境線が確立するのは、七世紀からであった。 <p. 257, 7 >

○ 唐・新羅軍は、ついに来なかった。

七世紀に成立した防人の制はそういう緊張と緩和の中で変化してゆき、九世紀の平安初期にな

ると有名無実になってしまった。

ところが、八四一（仁明朝の承和八）年になって、ふたたび緊張している。《中略》大宰府から百四人の防人が対馬におくられたりした。軍事的緊張はその翌年（八四二）もつづいている。大宰府の大貳が、国防上の理由から新羅人を日本に入れるべきでない、と奏請して許可された。ただし商人や漂流民は例外とされた。

このころになると新羅の国内統制力もゆるんできて、海賊がふえているような感じでもある。あるいはそういう海賊にそなえた緊張だろうか。 <p. 259, 7 >

司馬氏が一貫して主張しているように、古代の朝鮮半島と対馬、北九州は自由に交流・往来していたと見ていいだろう。また、当時は両側が海賊化していなかったのかも知れない。百済の滅亡による国境線の具体化によって半島と島をはっきりと両分されたに間違いなく、その熾烈な軋轢は想像を超えるものであったと考えられる。つまり、古代以後の朝鮮半島の沿岸地域はいつも倭寇の侵略に晒されていたわけである。新羅 30 代国王で百済を滅ぼして統一新羅を建国した「文武王（626～681）」のお墓は、遺言によって火葬し首都、慶州の東の海の「大王岩」に水葬されたのだが、文武王の水葬に関する伝説では、文武王は死んだ後も海の竜となって日本（倭寇）の侵略から国を守るためであったという話が伝わっている。論者は、この文武王のお墓、言わば「水中王陵」¹⁷⁾の存在と明らかな遺言の趣旨は、朝鮮半島の倭寇史を象徴する一大事件であると考えられる。前述したように、高麗の滅亡と朝鮮の建国は中国による影響よりも倭寇対策の失敗による国力喪失が主な原因であったと考えられる。高句麗は、大陸の隋・唐との長年の戦争に力尽いて、結局は唐・新羅連合軍に滅ぼされたのは勿論のことである。

死後、「海の竜となって国を守護しようした」のは文武王水中王陵に関わる民間の伝説であるだけに、客観的の信憑性は薄いと言える。しかし、世界の歴史で水中王陵の前例がないことと、当時、新羅の統一過程と日本列島との関係を勘案した場合、日本と倭寇に対する統一新羅の国家的認識の

象徴であったと考えられる。

17. 佐須奈の浦

○ 鎖国体制下にあつて、長崎が唯一の開港場であったことは、世界に知られている。ところが佐須奈もそうであつたことは知られておらず、日本史の教科書も黙殺している。

対馬宗氏は、李氏朝鮮国に寄生していたといつていい。

そのことはしばしば触れた。<p. 264, 2>

○ 徳川幕府は、秀吉によって凄惨なすがつたになった対朝鮮関係を回復したかった。それを対馬藩がやったというので、その功賞で、いまの佐賀県内の田代地方一万三千余石 (のち二万余石) を対馬藩にあたえている。外国から米をもらわねば生きてゆけない藩を、幕府が日本政府である以上、見捨てておけなかつたのである。

それでも藩を維持するには足りなかつた。このために対朝鮮貿易を独占する必要がある、幕府もそれをゆるさざるをえなかつた。 <p. 265, 17>

佐須奈が徳川時代のもう一つの開港地であつたのと日本人にもほとんど知られていない事実について司馬氏個人の意見はない。これは日本近代化の模範がヨーロッパであつたことと佐須奈が朝鮮の無関心によって停滞したことに原因があると思われる。

○ 朝鮮は倭館に少数の常駐者をゆるしつつも、厳重にかぎをかけて朝鮮人との恣意的な接触を許さなかつた。たとえゆるしたとしても朝鮮知識人には元来倭の知的水準に対する蔑視がはなはだしく、かれらから物を学ぼうなど、馬に話しかけるようなもので、思いもよらぬことであつた。 <p. 267, 5>

○ 李氏朝鮮の社会は、中国の古代にひとしい。農村は自給自足で、都市には問屋がなく、全体に貨幣が存在せず、自然、商品経済もない。文字どおりの堯舜の世を理想とし、経済社会もそれに近かつたことからみれば、東方礼儀の国といわれただけに中国よりも儒教的理想社会に近かつた。十九世紀の西洋人がアジアの停滞に驚くのだ

が、停滞こそ儒教の価値観にあうものであつたらう。 <p. 268, 1>

○ 佐須奈が、長崎のような混合文化を持つ土地にならなかつたことには、そういう事情がある。もし李氏朝鮮が隠者の国でなく、好奇心に富んだ国で、佐須奈に朝鮮館を置き、貿易官や認可された商人を常駐させていたとすれば、日朝文化の上でもおもしろい現象が、おこりえたであらう。 <p. 270, 8>

対馬の佐須奈と釜山の倭館が朝鮮対日本の間で同じ立場であつたのは、司馬氏の指摘のとおりである。対馬の相手が唯一朝鮮だけであつた理由は地理的運命によるものであつたかも知れないが、釜山の倭館は朝鮮政府によって恣意的に日本(対馬)に制限されていたと見てよかろう。その原因として、朝鮮儒学の閉鎖的・非現実的・非経済的属性を一貫して挙げている司馬氏の主張に対して論者も同じ立場である。また、釜山の倭館が長崎のような近代化の成功的開港地として発展できなかったことは残念極まりであるのは言うまでもない。

ただ、「停滞こそ儒教の価値観にあうものであつたらう」という司馬氏の断言には違和感がある。朝鮮で儒教化した儒学の特徴または核心思想は「修己治人」である。儒学は、自分自身の修養に専念し天下を理想的に治めるのを目標とする学問であり、またそのための実践であつたと見るのが一般論である。また、「徳」を養うために、「習うこと」と「知ること」を大事にし、伝統を保ちながらそれに新たな意味を付け加えることも大事な項目として認めている。窮極的に儒教は「治者」のための「学」であつて強制的統治より「教話」を尊重するので、この場合は、「儒学」という言葉よりも「儒教」という言葉で言っているのが普通である。そして、儒学でも統治者の無謀な悪政に果敢な批判をしたり、王朝の交替を革命理論によって正当化する役割も果たす場合もある。

司馬氏が「儒教」と「儒学」の一般的相違についてどんな意見をもっていたのか知る術がないが、すくなくとも「朝鮮の儒教」を「中国の儒学」から変身したものと見做しているのは、彼の朝鮮(韓

国) 関連の作品から見ると明らかである。でも、朝鮮の儒教が中国儒学の本質まで歪曲して受け入れたわけではない。朝鮮の儒学は政治や統治の理念化過程で変質し、運用の過程で理論と一脱したと見るべきである。だから、「停滞こそ儒教の価値観にあうものであったろう」という司馬氏の意見は無理なところがあると言わざるを得ない。

Ⅲ. おわりに

司馬氏の韓国(朝鮮)関連作品である「韓のくに紀行」と「耽羅紀行」は、朝鮮半島本場の紀行であっただけに韓国が舞台になっているのは当然のことである。しかし、「壹岐・対馬の道」は、24のタイトル内 17 のタイトルで朝鮮と朝鮮半島との関わりについて触れているのがわかる。

その内容をまとめると、1) 日本神道の原型は対馬にあり、対馬の古神道は朝鮮に定着した古代大陸信仰の影響を受けていたと見ていること 2) 「遣新羅使」の存在確認と単発性・無成果であった役割の分析 3) 豊臣の朝鮮出兵の無謀さと日韓合併の間違いの指摘 4) 中西氏の山上憶良の百済流民説への賛同 5) 古代朝鮮半島の文字(イドゥ等)が存在していないことへの残念な遺憾表明 6) 元・高麗連合軍の日本侵略過程説明 7) 朝鮮儒教文化の前近代性と閉鎖的弊害の指摘等である。

このような内容において、1) 日本の古神道の原型が対馬 ⇒ 朝鮮半島 ⇒ 大陸北部の経由であると主張している司馬氏の立場はいつも一貫して、「壹岐・対馬の道」15年後の「耽羅紀行」で済州島の土着信仰である巫堂(巫女)の文化から古代日本信仰の姿を見つけて共感している。2) 「遣新羅史」に関する言及は、その歴史的存在自体がほとんど知られていない韓国側としては意外であるが、統一新羅の華やかな発展とは別に、日本側に積極的外交政策と国際感覚があったのを反証していると考えられる。3) 韓国側に敏感な問題である豊臣の朝鮮出兵と日韓合併について、司馬氏は否定的批判の立場を堅持しているし、「韓のくに紀行」と「耽羅紀行」でも同様である。4) 中西氏の主張を引用した山上憶良の百済流民説に対

する賛同の立場は、大伴家および『万葉集』の作者未詳の歌全般に係わるかも知れないあまりにも重要で膨大な問題であるだけに、根拠資料不足の現実ではやむを得ないことであつたと見られる。

5) 司馬氏は、古代朝鮮の文字が不明であることに遺憾の意を表しているのに続き、朝鮮半島固有の名字が中国式に変わってしまったことに、他の作品ではもっと強い惜しみを披露している。史料を大事にする歴史小説家としては当然のことと考えられる。6) 高麗が元に征服されて半島全体が疲弊し国力が衰退したのは事実であるが、高麗王朝末期は日本の「三島倭寇」を中心とする倭寇勢力に蹂躪されて滅亡への決定打を受けていたことに対する司馬氏の認識は見当たらない。つまり、司馬氏の対朝鮮半島認識は、対中国関係に偏っている可能性を指摘したい。7) 朝鮮儒教に対する否定的認識は、司馬氏の対朝鮮認識の核心根幹であると言っても過言ではない。「韓のくに紀行」と「耽羅紀行」には、より赤裸々な表現がある。論者は、司馬氏の朝鮮儒教批判を結果論として認識する上で、朝鮮後期の儒教の弊害について司馬氏の意見を認める立場である。ただ、朝鮮と中国が近代化に軟着陸できなかつた原因を儒学の本質から引き出している点においては賛成しない。中国の儒学の定着、朝鮮の儒教の定着、日本の儒学の定着はそれぞれ違う。朝鮮の場合、初期と中期 — 初期に限るとしても — 儒学は儒教化する過程で政治理念として役割を十分に果たしたわけである。つまり、「閉鎖」と「停滞」が儒学の原理というのは結果中心の主観的論理であると考えられる。

時差はあっても、東アジアは同じ鎖国の時代があつた。日本・韓国・中国の鎖国環境と儒学の定着・役割に関するそれぞれの特徴をよりきめ細かく研究分析すべきだと考えられる。日本は島国の特徴を生かして大陸の文化をよく消化したので鎖国の時代も内部は潤っていたと言えるなら、朝鮮は半島国家の特徴を自ら否定して停滞してしまい、内部は疲弊したと言ってよかろう。釜山の倭館が長崎のような開港地と成れなかつたのはこのような理由でもあって、朝鮮半島に類似の例は他にもたくさんある。

半島国家が閉鎖されて文化的に滞ってしまうと

どのような凄惨な結果になってしまうのかを朝鮮と朝鮮文化は如実に反証している。朝鮮半島と日本列島の飛び石である対馬はその狭間で極端的役割を余儀なくさせられたわけで、今もその運命に変わりはない。それで、次の「壱岐・対馬の道」といった類の作品にも大半は朝鮮半島が挙げられるのは間違いないと思われる。

註

- 1) 全彰煥、2011年3月、『九州情報大学研究論集』第13巻
- 2) 全彰煥、2011年8月、韓国日本近代学会、『日本近代学研究』第33輯
- 3) 司馬遼太郎、1990年、朝日新聞社、街道をゆく28『耽羅紀行』、p. 228, p. 246, p. 259
- 4) 中西進氏は著作『悲しみは憶良に聞け』『万葉歌人の愛そして悲劇』で、山上憶良と家持が百済流民であろうと述べていて、司馬氏も同意の立場である。
- 5) 司馬遼太郎、2008年、朝日新聞出版、街道をゆく2『韓のくに紀行』、pp. 255~256
- 6) 司馬遼太郎、2008年、上掲書、pp. 105~106, p. 221
- 7) 大伴旅人は大宰帥として大宰府に赴任した後、天平2年(730年)息子の家持とともに帰京したと言われている。
- 8) 新井白石の進言によって幕府が通信使に対する待遇をあらためたのは一七〇一年である。
司馬遼太郎、2008年、朝日新聞出版社『壱岐・対馬の道』、p. 168
- 9) 雨森芳洲は「朝鮮交接之儀ハ第一人情事勢ヲ知り候事肝要ニ而候」として、「日本と朝鮮」の「諸事風義」の違いに留意していて、さらに秀吉の朝鮮侵略に否定的であった。
- 10) 司馬遼太郎、2008年、前掲書、p. 125
- 11) 司馬遼太郎、1990年、前掲書、pp. 111~112
- 12) 「蒙古」は「蒙(くら)くて古(ふる)い」、つまり、「野蛮で文明にうとい人々」を意味する。中国人は、「蒙古」はモンゴルの発音上の当て字であり、そこに悪意はないと説明しているが、中国語の発音で「蒙古」は「メング」となり、発音上の当て字にすらなっていない。「メング」はモンゴル語で「阿呆」を意味する。古代日本を意味する「倭」も、「小さい人々」という差別的な意味があった。そのため、日本はその後「倭」を「和」という文字に置きかえたのである。
- 13) アーノルド・J・トインビー (Arnold Joseph

Toynbee, 1889~1975)、イギリスの歴史学者、代表著書『歴史の研究』

- 14) 1980年代まで、イドゥ文字は新羅の3大学者とされているソルチョン(薛聰, 655年~?)によって考案されたと言われてきたが、今はその以前から使われていたのをソルチョンがまとめて整理したと定義している。
- 15) 朝鮮王朝(1392~1910)時代、朝鮮人の30~50%が奴隷だったと戸籍に記されているが、良民(百姓)の戸籍登録は全体の半分しか載っていないので、10~30%が正しいと見做されている。
- 16) 片瀬博子、2000年、西日本新聞社、『新、筑紫万葉散歩』、pp. 13~14
- 17) 正式名は「文武大王水中王陵」で所在地は韓国慶尚北道慶州市陽北面奉吉里である。慶州から車で40分の距離にあつて、日本の観光客にも広く知られている。近くの感恩寺(跡地)は、文武王の長男で新羅の第31代国王である神文王が文武王の功德を奉って建立したお寺である。後の研究から、風水地理学的に「水中王陵」と「感恩寺」の位置は竜の口と目にあたるのが判明されている。

参考文献

1. 司馬遼太郎、2008年、朝日新聞出版社『壱岐・対馬の道』
2. 司馬遼太郎、1990年、朝日新聞社、街道をゆく28『耽羅紀行』
3. 司馬遼太郎、2008年、朝日新聞出版、街道をゆく2『韓のくに紀行』
4. 中西進、2009年、光文社、『悲しみは憶良に聞け』
5. 中西進、2000年、日本放送出版協会、『万葉歌人の愛そして悲劇、憶良と家持』
6. 片瀬博子、2000年、西日本新聞社、『新、筑紫万葉散歩』
7. 清藤鶴美、1971年、大宰府天満宮文化研究所、『菅家の文華』
8. 上垣外憲一、1989年、中央公論社、『雨森芳洲』